根来寺　重要文化財（建造物）新規指定に係る資料

１　名　称：根来寺（ねごろじ）　６棟

大伝法堂（だいでんぼうどう）（１棟）

附（つけたり）・棟札（むなふだ）２枚、板札（いたふだ）４枚

光明真言殿（こうみようしんごんでん）（１棟）

大門（だいもん）（１棟）

不動堂（ふどうどう）（１棟）

附・厨子（ずし）１基

行者堂（ぎようじやどう）（１棟）

聖天堂（しようてんどう）（１棟）

附・板札４枚

２　所在地：岩出市根来（ねごろ）

３　所有者：宗教法人　新義真言宗総本山根来寺（しんぎしんごんしゆうそうほんざんねごろじ）

４　説　明：

根来寺（ねごろじ）は、和歌山県岩出市根来に所在する新義真言宗の総本山寺院で、和泉山脈の南麓に広い境内を構える。平安時代末期、僧覚鑁（かくばん）により高野山上に創建された大伝法院（だいでんぼういん）に起源を持ち、のち根来の地に移転し、室町から戦国時代にかけて大寺院に発展した。天正13年（1585）の兵火で大きな被害を受けたが、近世を通じて復興が進められた。

大伝法堂（だいでんぼうどう）は、現在の根来寺本坊の東方に国宝の大塔（だいとう）と並んで建つ。前身の仏堂は天正兵火の直後に解体され、文政７年（1824）に再建されたのが現存する大伝法堂である。本尊である巨大な仏像を安置し、多数の僧侶が出仕する行事にも対応できる広大な内部

空間を有する。根来寺の宗教活動の中核となる施設であり、華美な装飾はないものの、重層の屋根を持つ県内屈指の大規模仏堂として貴重である。

光明真言殿は、本坊西側に接続して建つ。紀伊徳川家の支援により享和元年（1801）に建立された建物で、一族の菩提を弔う場でもある。現在は宗祖覚鑁を祀る堂として機能している。前方の外陣と背面側に突出する内陣で構成され、外陣は内部に柱を立てない一室の大空間であるが、繊細な小組格天井を張り、穏やかで気品ある内部空間を作り出している。内外ともに住宅風意匠でまとめた上質の仏堂である。

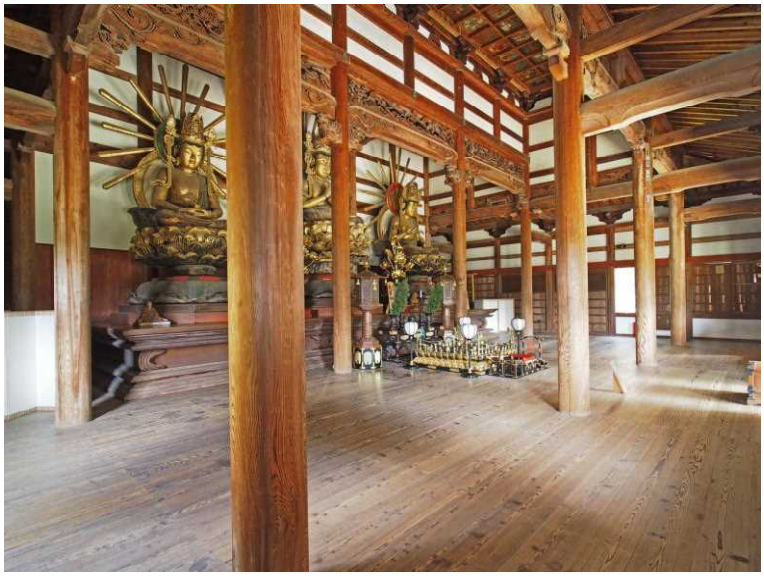
大門は、境内西方に位置する正門で、近世における根来寺復興の最後を飾る事業として弘化２年（1845）に建立された。造営には地元根来の大工とともに加茂（海南市下津町）の大工が参加していることが棟札より判明し、細部には独特の意匠を用いる。大寺院の正門にふさわしい規模雄大で重厚な二重門である。

不動堂は大伝法堂の南東部に位置する八角円堂で、建立年代は江戸時代中期に遡るとみられる。数少ない大規模な八角円堂として貴重である。内部の厨子も手の込んだ上質の作例である。行者堂と聖天堂は光明真言殿の西側に接続して建つ。行者堂は江戸時代中期の建立と考えられ、不動堂とともに近世復興の早い時期に建てられた仏堂として貴重である。簡素ながら木柄も太く、しっかりと作られた仏堂である。聖天堂は享保21年（1736）に建立され、その後、池に面する現在地に移築された。檜皮葺とし、小規模な堂であるが細部まで丁寧に作られる。

以上の６棟はすべて、根来寺の近世における復興の過程で整備されたものである。新義真言宗の信仰の中心となる大伝法堂、紀伊徳川家の支援のもとに建立された光明真言殿、重厚で規模雄大な大門は、いずれも天正兵火後の境内復興の中枢をなす大規模建造物であり、不動堂など他の諸堂とともに高い歴史的価値を有する。大空間を実現するための構造的工夫や細部意匠に認められる地方的特色など、紀北地方における近世中・後期の建築技術や意匠の展開を知るうえでも重要である。

提供写真　　根来寺　６棟

①大伝法堂



②大伝法堂（内部）

③光明真言殿

④光明真言殿（内部）

⑤大門

⑥不動堂

⑦行者堂

⑧聖天堂